

【学会レビュー】

国際宗教学宗教史会議第 19 回世界大会

(品川・2005 年 3 月)

高 山 眞知子

上記大会が一週間（2005 年 3 月 24 日～30 日）にわたって東京品川・高輪プリンスホテルで開かれ、筆者は日本宗教学会会員として参加し論文（英文）を発表した。

この会議は 1950 年に設立された世界最大の宗教研究者の国際学術団体で、ユネスコの支援をうけ、5 年に一度世界大会が行われる。今回は、日本で最初の宗教学講座が開設されてから百周年、日本宗教学会設立から 75 周年を記念して招致を引き受けたとのことである。

ともかく発表の数とテーマのバラエティがすさまじい。セッションが 17 あり、それぞれが同時に約 25 個のパネルを持ち、それぞれのパネルで 3～4 本の論文の発表、つまり優に千本を越える発表と、さらに公開シンポジウム、全体会議、特別セッション、バンケットなどが巨大ホテルの大小の会場を使って行われ、来場者の皮膚の色も多様であった。最近ではシドニー、ローマ、メキシコシティ、南アフリカ・ダーバンなどで開かれている。今回は昭和天皇の弟でオリент史家の三笠宮（大会名誉総裁）の挨拶もあった。

言うまでもなく同時多発テロ後はじめての大会であり、そのことは間接にさまざまな点に現れていた。まず大会テーマが「宗教——相克と平和」、サブテーマが「戦争と平和、その宗教的要因」、「技術・生命・死」、「普遍主義的宗教と地域文化」、「境界と差別」、「宗教研究の方法と理論」などである。さまざまな宗教の発展途上国からは、大会からの経費支援により参加し、堂々と珍しい内容の発表が多く行われていた。

一方、グローバルなテーマではないが、チャームिंगな発表も多かった。会場をはしごするのが大変である。北山修氏（60 年代のフォーク・ソング「帰ってきたヨッパライ」の作者で、今は九州大学教授の精神科医）の「夕鶴」分析（「見るなの禁止・精神分析的理解」）、島村一平氏（国立民族学博物館）の冷戦終結後のモンゴルにおける先祖崇拜的シャーマニズムの復活についての分析、中里巧氏（東洋大学）のノルウェー木造教会にみる北欧神話の痕跡についての分析、また、欧米人数人のパネル「科学哲学と宗教研究」における、神経解剖学・認知科学と宗教経験の関係についての論争、等々である。

筆者は、「モルモン教と日本文化」というパネルで、「モルモン教系譜志向性の要因。E・トッドの家族モデルによる考察」という発表を行った。同パネルでの発表は、アフリカ系アメリカ人のマークス・H・マーティンズ氏（ブリガム・ヤング大学・ハワイ校）と竹村一男氏（立正大学）であった。聴衆は 15 人程度であったが、結局これによりシドニーへ招かれることになったので、発表要旨を、プログラムに載せた原文のまま記すこととする。

「天皇制の伝統を持つ日本人にとって、新興国アメリカ生まれの新宗教モルモン教が系譜志向性を持つことは、一見不思議である。その要因を、主に信徒の出身国の家族形体から考察する。フランスの社会人類学者エマヌエル・トッドは『新ヨーロッパ大全』において、ヨーロッパの家族形体が多様であり、親子関係の権威主義の存非、兄弟関

係の平等主義の存非の点から四形体に分類できるとし、その一つを「直系家族」と呼んだ。またその実践地域がドイツ・スイス・スカンディナヴィア・スコットランド等であることを明らかにした。19世紀モルモン教の系譜志向的教義の形成期は、これらの地域からの移民の改宗者が多かった。出

身国の直系家族制度における系譜志向性が、アメリカの新教義の中に親和性を見いだしたものと思われる。日本も直系家族の永い伝統を持つ地帯なのであり、天皇制もモルモン教も、トッドのモデルにより、その系譜志向性は家族形体と心性の親和性として説明される。」

モルモン教 200 年記念シンポジウム

(シドニー・2005年5月)

モルモン教の正式名称は「末日聖徒イエス・キリスト教会」。創始者ジョーゼフ・スミスの生誕200年を記念してこの教派の宗教・社会・神学的成果を検討するシンポジウムであり、オーストラリア・シドニーのニュー・サウス・ウェールズ州議事堂（有名なオペラハウスのすぐそば）で5月20日・21日に開催され、筆者は日本のモルモン教研究者として招待され、「ハロルド・ブルームの「影響の詩学」とジョーゼフ・スミスのメタレプシス」という論文を発表した。

この会のスポンサーは、アメリカのリッチモンド大学、オーストラリアのグリフィス大学、モナッシュ大学、末日聖徒イエス・キリスト教会である。この数日前にはアメリカのワシントン・DCの連邦議会図書館でもより大規模な同主旨の会が開かれた。出席者の大半は大学関係者で、そのうち半分位はモルモン教徒、あと半分は、筆者も含め、この教派に知的関心のあるいわゆる「モルモン・ウォッチャー」である。

5個の部会があり、アメリカやイギリスの他に環太平洋地域のオーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、バングラディッシュ、サモア、パプア・ニューギニアなどから発表・参加者が200人程集まり、全員が同室で総ての発表やパーティに同席するという（教会のような）スタイルのため、非常になごやかで、かつこの地域でのモルモン教普及の現況が察せられた。

部会のテーマは、宗教者としてのスミス、グローバルに拡大してゆく教団、21世紀の課題、教団

の経済活動、モルモン教の家族観、などである。

筆者は、「グローバルに拡大してゆく教団」の部会で、サモア、インドネシア、ニュージーランド、アメリカなどからの発表者に混ざり発表した。

そもそもかつて太平洋地域へのアメリカからのキリスト教の伝道は捕鯨船と共にやって来たが、このためこの地域はキリスト教になじみを持っており、その土壌の上にモルモン教が広まってゆく。トンガでは人口の半数が同教徒である。

今回ニュージーランドからの発表者が、モルモン教会によるマオリ農業大学創設の実験について報告したのは、本学（江戸川大学）がニュージーランド研修を必修としている関係もあり興味深かった。

筆者が発表で扱ったハロルド・ブルームはイェール大学の高名な文学批評家（いわゆるポスト・デコンストラクションの）で、氏は「影響の恐怖の詩学」の観点から一早くモルモン経典の作品としての独自性・真正性を評価しており、21世紀におけるさらなる発展を予測している学者であるが、筆者の発表では、スミスのこの諸作品を通してそれぞれの主人公が順次に聖書の時代を廻り、「新しいイメージのアダム」として定着することを、ブルームの「メタレプシス」という観念で整理した。後のパーティでは、なかなか好意的な質問や感想をいただくことができた。

パーティでは音楽演奏や奉仕活動への授賞式などが行われたが、対象となったのは、一つは、イスラム教経典コーランの英訳事業であり、もう一

つは、前年十二月の東南アジア、バンダ・アチェの津波への救援活動に対してであった。

筆者はシドニー訪問は二回目であるが、街を散策して、前回30年前より多くの民族が生活していることを実感した。リトワニアから来てピザ屋で働く少女、寿司を売るタイ人、コンビニ経営で愛想のよい中国人、イタリアから来たタクシー運転手…。ここでの多民族性は、アメリカの移民到着順序による民族間の序列とも、ヨーロッパの「文明の衝突」による序列とも異なり、さまざまな背景の人間がより個人として勝負している、という印象を受けた。この様な所では、上昇志向の普通の人間を励ます新宗教には、普及の条件が整っ

ているように思われた。

(ちなみに、モルモン教の本拠は先の冬季オリンピックのソルトレークシティである。歴史的には信仰実践としての一夫多妻制度を半世紀ほど実行し、迫害されてここに到着しこの地域を開拓した。最近興味深いのは、禁酒禁煙等の厳しい同市へ中年化したミック・ジャガーの「ローリング・ストーンズ」の公演が来たこと、2005年夏のニューオーリンズの大洪水の黒人被害者へソルトレークへの移転を推めていることである。200年目の新宗教にはかなり凄い潜在力がありそうで、「モルモン・ウォッチャー」としては、目が離せない。)

関東社会学会第53回大会

(立教大学, 2005年6月18日・19日)

本大会は名前の通り関東地域の社会学者の大会であり、全国規模の「日本社会学会」の秋開催の大会に比べ、若手研究者の比率の高いことが特徴で、テーマの選択にもその関心・片寄りが現れていて興味深い。今期の学会会長は上野千鶴子氏(東京大学)、大会開催実行委員長は宮島喬氏(立教大学)で、博識・慧眼・経験豊富の実力派の中年大先輩が、若手を鋭く見張りつつ励ましているという構図で、社会学の将来性に希望を抱くことができた。

二日間の大会は、全員参加的なテーマ部会が三個(「文化戦略の社会学」、「グローバリゼーションの中の階級・階層構造」「社会学のアイデンティティ」と、分野別の自由報告部会が12個で、50本余の報告があった。

テーマ部会の「文化戦略」という観念は、P.ブルデューの無意識的な「文化再生産」に対し、村起し・祭再興などの意図的再生産の点から、文化社会学の大きな話題になっている。

「グローバリゼーションの中の階級・階層構造」は、最近の国際間労働移動とエスニシティ、ジェンダーの不平等など、深刻な問題に触れている。

自由報告の「理論」部会では、上野千鶴子氏の司会の下、ギデンズ、臨床社会学、クーリーやバーガーについての分析、「トランスナショナリズムと移民」部会では、韓国人女性の国際結婚、滞日イラン人の親族ネットワーク、フィリピンの女性移民労働などの分析、「宗教・社会運動」部会では、韓国のプロテスタント教会、「生長の家」のプロライフ(中絶反対)論、「感情・身体」部会では、生活保護ケースワーカーの感情労働、車内空間の身体技法など、「ジェンダー・セクシュアリティ」部会では、軍隊のフェミニズム、近代日本の「少女」像など、「仕事・進路」部会では、バイク便ライダーのエスノグラフィー、女子高校生の将来像など、「メディア・コミュニケーション」部会では、巡礼のインターネット・コミュニケーション、丹下健三など建築家の表象性など、多様な発表があった。

発表者や司会者の中には本学でかつて非常勤講師をお願いした方々も多く(崎山治男氏、久木元真吾氏など)、嬉しいことであった。

なお、開催校・立教大学の社会学部はその沿革が本学・応用社会学科のそれと似ており、気になっ

た。まず、1949年設立の文学部から社会学部が独立（1955年）し、そこからコミュニティ福祉学部・観光学部が分生し（1998年）、さらに2006年には文学部から現代心理学部が独立し、ここには心理学と映像身体学科が置かれる。上記学会

大会の当日、キャンパスの別棟では、勅使川原三郎氏（コンテンポラリー・ダンサーで身体表現論担当予定）のダンス・パフォーマンスが行われていた。

比較舞踊学会第16回大会

（松戸・聖徳大学 2005年11月）

11月6日に開かれたこの学会に、まだ入会したばかりの新会員・聴衆として参加した。きっかけは、江戸川大学人間社会学科で非常勤講師をお願いしている近藤洋子氏（元・国際基督教大学助教授・民俗舞踊研究家）からこの学会の存在をうかがったからである。

プログラムは、特別講演が川崎淳之助氏（元立教大学教授・元聖徳大学教授）の「ダンテ『神曲』における舞踊について」、一般研究発表は合計11本で、近藤洋子氏の「徳山の盆踊について」、神戸周氏（東京学芸大学）の「ブラジル・ペルナンブーコ州レシーフェの民衆芸能とポピュラーダンス」、木村はるみ氏（山梨大学）の「巫女舞の伝承とその形態」、また聖徳大学の体育館での実演による安広美智子氏など4名（聖徳大学・同短期大学部）による「カドリール」、森下はるみ氏（お茶の水女子大学名誉教授）による「学校ダンス「フェュスト」の演舞法」、国枝タカ子（茨城大学）の「古典舞踊の「優雅な動き」に関する三次元動作解析」などが含まれる。

参加者は50名程であるが、関東近辺の諸大学で体育を担当しながら長年自分の研究テーマを追究してきたという方が多いように思われた。

聖徳大学は女子大学で幼児教育についての研究も盛んなようで、同校の体育館には巨大な鏡付きの黒板やバレエ・バーや音響設備も整っており、舞踊教育の条件を考える上で参考になった。

なお、この学会との関連で、『舞踊と身体表現』（日本学術会議・文化人類学民俗学研究連絡委員会編・2005年）という出版物があり、目次からこの分野の潜在力がうかがわれたので、一部記しておく。「日本の舞踊における身体づかい」（森下はるみ）、「韓国ムダンにおける神懸りと身体」（朴善姫・ロンドンSOASアカデミックビジター）、「ニジンスキーの身体」（鈴木晶・法政大学）、「ダンスのセラピー効果：ニューヨークのドミニカ系集団の事例」（三吉美加・慶應大学）、「無重量環境での身体表現」（石黒節子・お茶の水女子大学）、「コンテンポラリーダンスにおける静穏の身体」（酒向治子・お茶の水女子大学）などである。

アメリカ学会第38回年次大会

（日本女子大学、2004年6月）

本学会は筆者の出身分野でもあるので院生時代に入会して以来なるべく出席につとめている。直近の2005年度大会（京都大学）は都合で欠席したが、その前年回については是非報告しておきたい。

毎年大会は二日間で、会長講演・シンポジウム・部会・ワークショップ・分科会・自由論題から成り、全国各地の大学から1000人位は集まりなかなか賑やかである。今回の具体的テーマは、シン

ポジウムが「戦争とアメリカ社会」、部会は「大統領制の今」、「文学とアメリカ帝国」「ネイティブとは何か」、「日米関係150年」など、ワークショップは英語で外国人研究者の参加もあり、「Transmission of Culture」、「Gateless or Gated? New Social Stratification in American Society」などであった。自由論題の発表は15本で文学から国際関係までをカバーする。この学会の特徴は、なかなか学際的で、またアメリカ研究という分野が大学組織上は文学・語学教育と近いことやアメリカ社会のいわゆる一般的フェミニズムの傾向に魅かれてか、元気な女性会員の多いことである。今回も「戦争花嫁と日系アメリカ社会」、「身体の亡霊——アメリカ女性ゴシック小説における身体のスペクタクル」などの発表もあった。

今回の自由論題発表のうち、安場保吉氏（大阪学院大学、元京都大学教授）の「土地アヴェイラビリティ説は19世紀出生率の説明になお有効か」を特に紹介しておきたい。19世紀初頭アメリカ

における白人の高い出生率とその急速な低下は良く知られた事実であるが、それを説明する説として安場氏の土地アヴェイラビリティ説がアメリカ経済史学界に長年受け入れられてきた。最近はいくつかの異説からの挑戦がある（遺贈目標仮説、異世代間取引仮説、ライフサイクル移行仮説）。発表はこれらの異説をデータに基づいて分析した上、パッサリと反論したものである。安場氏はノーベル賞経済学者サイモン・クズネッツやロバート・フォーゲルと並び「クリオノメトリックス」（数量経済史）という分野を開発された。氏の、アメリカ西部開拓時代の人口動態の変化についての研究は、筆者が、西部生まれの新宗教モルモン教の例外的な人口現象の背景に関心を持ち、モルモン研究で博士論文をまとめる大きな契機となった。安場氏はこの学会発表の後、翌年4月に急逝され、拝顔の最後の機会になってしまった。知的愛惜の念をこめて記しておきたい。